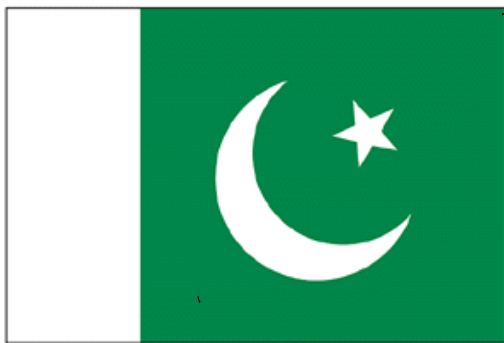


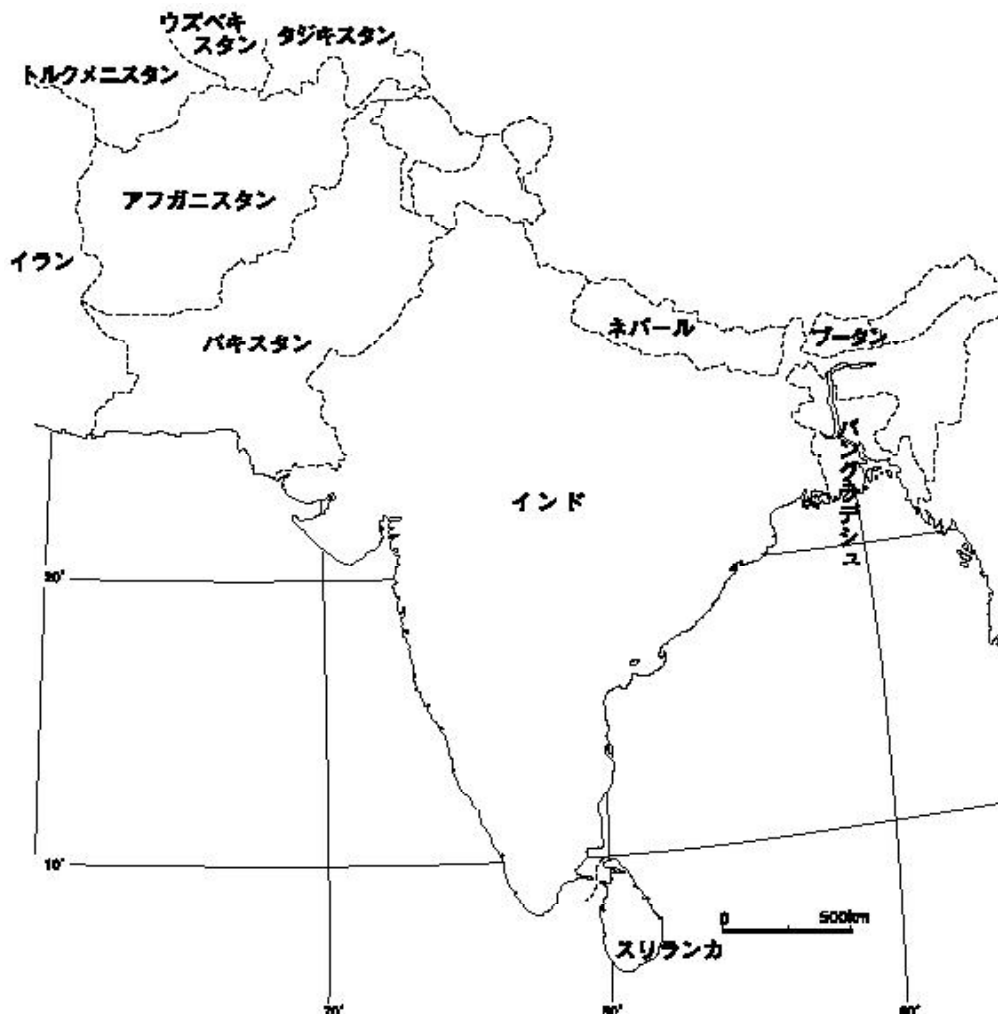
パキスタン イスラマバードでの生活

平成14～16年度イスラマバード日本人学校派遣
美瑛町立美瑛小学校 堀内隆功



【パキスタン国旗 ～三日月と星の意味～】

パキスタンの国旗には白い三日月と星が形取られています。三日月と星はイスラム教のシンボルです。白色は「平和」を意味します。三日月は「進歩と発展」を表しています。三日月が徐々に満月になるように、パキスタンが発展し成長していくことを願っています。星は「光と導きと知識」を表しています。5つの角は、イスラム教の5つ原理を表しています。



I はじめに

2002年1月22日夕刻だったか、当時の在籍校の校長から「イスラマバード日本人学校への即派遣が内定したので、意思確認の返事を明日までにしてほしい」と連絡を受けた。わたしの頭には、どこに行こうか「No」の選択肢はなかったので即答してもよかったのだが、家族のことが頭をよぎったので「わかりました」と返事をして一晩家族会議を開いた。実際のところ、妻は相当悩んだようだが、何とか説得した形ではあったものの了解してもらった。早速、その週明けから1週間、東京での派遣教員内定者の研修会に参加した。

イスラマバードはパキスタンの首都であるが、内定が決まったときは、まさに話題の国になっていた。それは前年の9月11日に起きたニューヨークにおける同時多発テロ事件、いわゆる9.11テロの後、パキスタンはアフガニスタンの隣国でありタリバン政権を支援していたとしてアメリカの標的になりかねない存在であり、国の未来を左右するような岐路に立っていた不安定な国であったからである。実際に、イスラマバード日本人学校はテロ直後の9月17日より臨時休校に入り、学校関係者、保護者、大使館、日本人会等関係組織・団体の尽力で、何とか翌年1月7日に再開にこぎ着けたばかりであった。

そんな中での派遣であったので、周囲の反応は心配の声ばかり。脳天気だったのは、本人だけだったのかもしれない。「パキスタンで戦争が起きるんじゃない?」「カブールまで500kmしかないんだよ。」等々。実際に、派遣1か月前の3月には、イスラマバードのキリスト教会での爆破事件があり、日本人学校の保護者1名が重傷を負ったということも聞いて、いよいよ大変なところに行くんだという実感がふつふつと湧いてきた。

4月5日に日本を出発、翌日着任となったものの、家も決まらず、土地にも学校にも慣れぬままに、パキスタンはインドとの関係が悪化、軍事衝突の危機が高まったため、児童生徒の帰国完了後、夏休みを1か月以上前倒しして6月9日に退避帰国となってしまった。これはつらかった。原籍校に身を置くにも落ち着かず、そのような中で全国に散らばっている子ども達とも連絡を取りながらの生活となった。いつ戻れるかわからない不安は募るばかり。

しかし、この時もパキスタンに住む大勢の邦人の努力があり、7月11日に授業を開始することができた。子ども達との再会をはじめ、パキスタンに戻ることができた喜び・感激は忘れられない。

その後は退避もなく、無事3年間をパキスタンで過ごすことができた。もちろん、欧米へのテロ活動、アメリカとの協力関係を進めるムシャラフ政権への反発、宗教間あるいは宗派間抗争、印パ間の問題等、武力行使への危機意識は常に高く持っていなければならなかったが、それでも政情も少しずつ安定方向に向かい、個人として、また、組織的に気をつけながら生活していく中で、充実した日本人学校の生活、そして異国異文化を肌で感じながらの新鮮な生活を送ることができた。

日本でのパキスタンといえば、どうしても「軍事クーデター」～軍事政権、「核実験の国」～経済制裁、「イスラム原理主義」～テロリストの温床、「カシミール紛争」～印パ問題、といったように負のイメージが強いようだが、一方で、太古にモヘンジョ・ダロ遺跡で有名なインダス文明があり、その後ガンダーラ文化が栄え、現在はイスラム教国家であり、また、北方には世界の屋根がそびえ、シルクロードが延々と続くという、悠久の歴史を感じさせる国でもある。日本との関係も戦後直後から始まり親日家も多い。貧しい国でありながらも、大勢の信仰心の厚い人々が寄り添い合いながらゆっくりと時間が流れていく、といった素朴な国と言えるかもしれない。そのような面も、この報告の中でお伝えできたら幸いに思う。

II パキスタンの概要

1 歴史

(1) 国家の成立と正式名称

正式名称は、「パキスタン・イスラム共和国」といい、1947年8月14日にイギリスより独立しました（インドとの分離独立となる。ちなみにインドはその翌日15日に独立した）。



*子ども達はこの形を「ティラノザウルス」と呼んでいた

独立当時は、現在のバングラデシュ（東パキスタン）も同じ国家で、インドを挟んで東西に1800kmも離れた飛び地国家でした。しかし、経済や政治上の問題に端を発した第3次印パ戦争の末、1971年3月に分離しました。「PAKISTAN」とは、「清浄なる国」という意味があるのですが、Pはパンジャブ州、Aはアフガン州、Kはカシミール州、Sはシンド州、T A Nはバロチスタン州と、国内の5つの地域名を組み合わせた名前となっています。

「パキスタン建国の父」といわれるジンナーが中心となり、イスラム教徒の国家建設を目指し実現させた、非常に新しい国といえます。

※カシミール問題

1947年、イギリスからパキスタンとインドが分離・独立するときに、カシミールの藩王ハリ・シングは独立するか、それともどちらに属するか、迷っていたといえます。その理由は、藩王はヒンドゥー教徒、住民のほとんどはイスラム教徒だったからです。独立の日が来ても、藩王は結論が出せず、そのうち、ギルギットやスカルドゥーの住民がパキスタンへの帰属を要求し始めたことで、藩王は危険を感じ、インドに入ることを発表し協力を求めました。その結果、インド軍とパキスタン軍の戦い（第1次印パ戦争）が始まりました。

この戦争は、国連の仲介で停戦しましたが、その後も2度にわたって戦争を起こし、核実験やミサイル発射実験など、お互いが譲らず、今も国境付近では両軍のにらみ合いが続いています。

(2) 古い歴史

独立からわずか60年近くしかたっていない新しい国ですが、モヘンジョダロに代表されるように、インダス川流域の歴史はとても古いものです。

歴史の教科書の中では、インドという名前で載っている部分の多くに、現在のパキスタンの歴史が含まれています。

しかし、これらの歴史の多くは、トルコ・アフガニスタン系王朝の侵攻の歴史であり、インダス川を中心としたインドの歴史であり、近代における西欧の侵略の歴史です。

日本との関係でいえば、仏教美術、仏像のふるさと「ガンダーラ」も、この国の歴史の一部です。

2 文化・宗教

(1) 民族

パキスタン人といっても、実は多民族国家で、パンジャブ人、シンド人、パシュトゥーン人、バルーチ人等様々な民族が入り交じって生活しています。

(2) 宗教（イスラム教）と習慣

そもそも、パキスタンの建国の理念はイスラム教によるもので、国民の 97 %はイスラム教徒です。

そのイスラム教の様々な習慣の中でも、豚肉が食べられない、アルコール禁止などは、日本でもよく知られている習慣です。

また、イスラマバードやカラチのような都会は別として、女性は人前にあまり出ることなく、見かけても頭から布をかぶっていたり、目の部分しか肌が見えない「ブルカ」を着ています。ちなみに、ブルカの下は、「シャルワール・カミーズ」（日本人は、略して「シャル・カミ」と呼んでいる。）という民族服が一般的。シャルワールはだぶだぶのズボンでウエストまわりが 3 m 位あるものをひもでしめます。カミーズは上着で、膝丈ぐらいまでである長い服。ふつう、男性も、シャルワール・カミーズを着ます。パキスタンにおける正装でもあります。

※イスラム教の教え

イスラム教は、610 年頃にムハンマド（マホメット）によって始められた宗教で、彼は神（アッラー）の教えを聞き、預言者としてそれを人々へ伝えました。ムハンマドが神からくださった言葉（啓示）を後に書き記したのが「コーラン（クルアーン）」といます。

イスラム教は、もとを遡ればキリスト教の教えから生まれていますし、キリスト教はユダヤ教が発端となっていますので、この 3つの宗教は一本の大きな大木（一神教）から分かれた宗教といえます。それだけに、お互いの非寛容さは、想像を絶するものであるといえます。

イスラム教では、その信仰に基づく規律や規範を行動にして表すのが特徴です。

最も、大切にされているのが、以下の「六信・五行」といわれるものです。

「六信」～イスラム教徒として信じなくてはならないもの

- ①アッラー … アッラーだけが神様で、他に神様はいないということ。
- ②天使 … 神の手助けをする人間と神の間の存在。ガブリエルやミカエルなど多数存在。
- ③啓典 … 神の言葉が書かれている本。コーランが一番だが、旧約・新約聖書も含まれる。
- ④預言者 … 神の言葉を伝える人々。ムハンマドは、最後にして完全な預言者といわれている。
- ⑤来世 … 世の中が終わるとき、最後の審判がくだされること。
- ⑥予定 … この世で行われる全てのことは、神によって決められているということ。

「五行」～イスラム教徒として行わなければならないこと

- ①信仰告白 … 自分はイスラム教徒であることをアッラーに宣言する。
- ②1日5回のお祈り … 1日に5回、メッカのカアバ神殿に向かってお祈りをする。
- ③ラマダン月の断食 … イスラム暦9月の1ヶ月間、日の出から日の入りまで全ての飲食をしない。
- ④喜捨（ザカート） … 自分の持っている財産に応じて、貧しい人達にお金や物を施す。
- ⑤メッカへの巡礼 … 生涯において、一度、サウジアラビアにあるメッカのカアバ神殿に巡礼する。

3 産業・経済

(1) 産業の構造と日本との経済的関係

産業別人口割合で行くと、約50%近くは農業人口となり、国の基幹産業となっています。また、綿花は世界第3位の生産量(2000年データ)を誇り、重要な産業となっています。

パキスタンから日本へは、綿糸、綿花、皮革、魚介類等を輸出しています。また、スポーツ用品(クリケットバット・サッカーボール)や絨毯なども有名です。その他、手術用のメスなどもパキスタンのものが使われています。一方、日本からは、自動車、繊維機械、電気機械、化学品などを輸入しています。街には、たくさんの日本製の車やオートバイを見かけます。

政府援助も、日本は一番の国となっています。経済的なつながりはたいへん大きいといえます。

4 言語

(1) 国語(ウルドゥー語)と公用語(英語)

国語はウルドゥー語です。ウルドゥー語は、基本的には、インドのヒンドゥー語と源を同じにしますが、ペルシャ・アラビア文字を使う点、ペルシャ・アラビア語の語彙を多く取り入れている点が違います。また、この国は多民族国家なので、各地方で使われている言語は違います。

しかし、ウルドゥー語は、そのような母体となる地方を持たず、また、本来それを母語とする民族も、総人口に対して8%しかいません。ですから言語を争点とした民族紛争も起きています。

それでも、独立後60年という時間を経てきた歴史と、今後、教育が広く進むにつれ、それらの問題を越えて、ウルドゥー語がパキスタンの国語としての地位を確固たるものにするでしょう。

国語はウルドゥー語ですが、公用語では英語であり、イスラマバードなどの都市部では、買い物などの日常生活は英語で十分通じます。

5 風土・気候

(1) パキスタンの国土

国土は日本の約2倍、人口は約1億4000万人、日本のように南北に長く、気候風土は一概にこうだとはいえません。北部は、山岳地帯でカラコルム山脈、ヒンドークシュ山脈、ヒマラヤ山脈がぶつかり合い、7000~8000m級の山が連なり(パキスタン国内には8000m級の山が5つあります。

そのうちの「K2」は世界第2位の山~8,616m~である)、その雄大な風景は、世界へ誇れるパキスタンの宝です。近年、その壮大な山々の景色に惹かれ、当地を訪れる日本人が増えてきました。

それら大山脈の氷河に源を發する大河インダスが国の中心を貫き、豊かな大地を作っています。しかし、実際には多くの土地は雨の少ない乾燥気候で、砂漠もあります。南部は、アラビア海に面し、雨は少ないものの、蒸し暑い気候です。

イスラマバードは国土の北寄りに位置し、この国の中では恵まれた自然環境の中にあるといえます。

(2) イスラマバードの風土・自然・気候

イスラマバード(ペルシャ語・ウルドゥー語でイスラム教の都という意味)はパキスタンの新しい首都(1963年移転)で、英国統治時代からの軍都であるラーワルピンディーの北西10kmに位置し、人口は約80万人の都市です。自然の原野に新しく造られた人工計画都市ですので、街並みは整然としています。他の都市では、馬、ロバ、牛、ラクダなどの動物を多く見かけますが、イスラマバード市内では規制されているため、ほとんど見かけることはありません。政治機能を集約化し、各国の大使館も多く、治安面、生活面、緑の多さなど、他のパキスタンの街とは趣をずいぶん異にしています。

気候については、モンスーンの時期を除いては、概して乾燥しています。ただ、気温は5月・6月の2ヶ月には、日中40度以上にもなります。しかし、空気が乾燥しているためあまり汗はかかず、日本の蒸し暑さに比べると、むしろ過ごしやすいのかもしれませんが。7月~8月には、モンスーンで夜間の雨が多くなります。湿気があり日本の夏のような感じです。

冬は、雪が降ることはめったにありませんが、0℃近くまで下がることもあり、ガスストーブをつけます。また、春秋は短いけれど、とても良い気候です。春は果樹の花々、秋は紅葉も楽しめます。

6 治 安

(1) 派遣期間中のパキスタンの様子

2002年4月に着任して以降、国家間の対立をはじめ、いくつか大きな事件も起きました。

最も緊張感が高まったのは、2002年6月のカシミール地方を巡る印パ間の対立で、武力衝突の可能性が高まり退避帰国（結果的には夏季休業を前倒しして、臨時休校の措置はとらずにすんだ）に至ったことであります。毎年、雪解け時期になると決まって対立が表面化してくるようですが、両国とも核を持っているだけに、わたしたちの危機意識は非常に高いものがありました。ただ、現在はかなり融和・改善の方向に進んできており、例えば、インド上空をパキスタン航空が運行できるようになったり、ラホールとデリーの2都市を結ぶバス運行、さらにはカシミール地方での両国間のバス運行まで行われるようになってきています。

印パ間の対立と併せて、一部にはアメリカ等のアフガンへの攻撃に対して強い反感をもっている過激派のテロへの恐怖もありました。派遣期間中、アメリカ人やイギリス人が狙われる事件が多発し、欧米人が続々と退避帰国する姿も見られ、また、そのような中で欧米人が集まりそうな場所は極力避けるよう行動をとったり、集まる場合は事前に情報を発出しないように慎重に行動をとったりしていました。それでも、アルカイダ残党の声明等により日本人もその標的に挙げられるようになると、さらに事態は深刻となり、日本人クラブ（邦人が様々なサークルや会議を行うために使用している施設）の利用を制限したり、日本人会行事（運動会や盆踊り大会）を中止したり、国内並びにイスラマバード市内の行動も制限・自粛せざるを得ない状況がしばらく続くことになりました。その間、親米路線を進めるムシャラフ大統領の暗殺未遂事件が2度起きたことも衝撃でした。また、日本人を含め外国人がよく利用する高級ホテルでの爆破事件（報道では漏電による事故といわれた）も起きました。そのような状況の中、日本人学校においても、スクールバス運行について、定点・定時の走行を避け、登校時刻を3パターンに分け、登校ルートも4コース作ってランダムに運行するなどの対応をとりました。2004年の7月には、日本人学校が、アメリカのビザセクションとイギリス大使館のそばにあったため、ロケット砲でそれらの建物の狙うという情報を得たときには、大使館領事班の指示を受け、やむなく1日臨時措置をとるという出来事もありました。結果は事なきを得たのですが、緊張感や危機意識は常に持っていなければならない状況でした。その他においても、長い期間、校外学習を自粛せざるを得ない状況が続き、さらに2004年度は、修学旅行の中止も余儀なくされました。

印パ間の対立、対欧米テロの脅威、そしてもう一つ危険なのが、宗教間の対立と宗派間抗争が挙げられます。2002年8月には、イスラマバード近郊のキリスト教系の学校で銃乱射事件があり、その直後にもキリスト教系病院で爆破事件が起きました。また、宗派間抗争は、パキスタン国内で9割程度占めるといわれているスンニー派と、少数派であるシーア派の対立があり、それが武力抗争として表面化することがあります。それぞれのイスラム寺院（モスク）での爆破事件がいく度も起き、イスラマバードでは宗教政党の要人が暗殺される事件も起きました。長い歴史の中の、終わることのない憎しみの連鎖を感じます。

最後に、一般犯罪についてですが、イスラマバードは国内では比較的安全と言われていましたが、実際は情報が入ってこないことも多く、やはり行動には慎重を期す必要がありました。幸い、派遣期間中にはイスラマバード市内の邦人に対して大きな事件はありませんでしたが、2003年6月には、ラホールで日本人旅行者がタクシー運転手に殺害されるという痛ましい事件がありました。さらには、無差別殺人として、購入した缶コーラの飲み口に毒が塗られてあり、それを飲んだ現地人が死亡する、という事件も起き、恐怖心を抱いたこともありました。

(2) 対策

爆弾事件のようなものはなかなか防ぎようがありませんが、ストやデモのときは、あらかじめ情報がありますので、出かけたり、その集会が予定されているところには近づかないようにしています。大使館から邦人に発出される危険情報や、新聞やテレビでの報道を現地スタッフから教えてもらうなど、常に情報を収集しておくことは非常に大切になってきます。その上で、個人の責任で対応する、組織として対策を講じる等、状況に応じて判断することになります。

特にわたしたち派遣教員は、ラワルピンディ、タキシラ、マリーといった、イスラマバード近郊を除き現地を離れる場合には、大使館を通じパキスタン外務省に許可を申請します。それでも、派遣期間中は、カシミール地方の管理ライン付近、インド国境付近、アフガン国境100kmの範囲（パシヤール・ケッタ市を除く）、及びシンド州（カチ・ハイラーバード市を除く）には、立ち入ることがほとんどできない状況でした。国内の行動範囲が厳しく制限されているため、日本人学校の修学旅行はここ数年、海外（2002年度ドバイ、2003年度スリランカ、2004年度中止）に出かけることが多いという実態になっています。

また、各家庭や組織においては、警備会社と24時間契約を結び、警備員（昼夜二交代制）を配置することがほとんどです。中には、個人宅で番犬として犬を飼う家もあります。

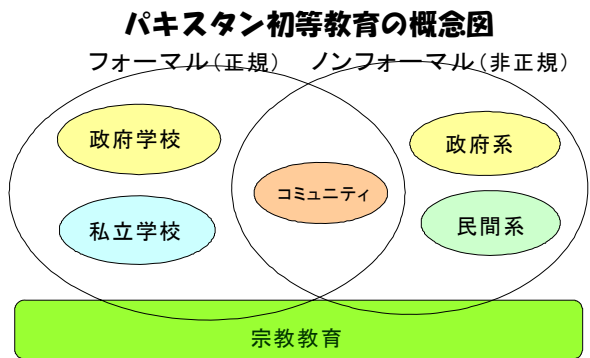
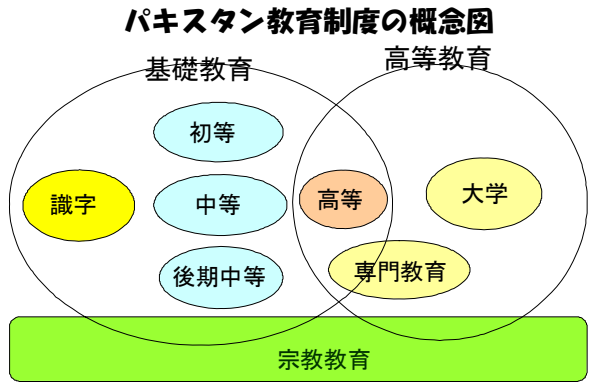
ただ、イスラマバードには約200名程の邦人が暮らしていますが、ここは日本ではなくパキスタンだという意識をもち、何が起きるかわからないということだけは頭に置いて用心をしていれば、特別に恐れる必要はなく、また、苦労や苦痛を感じるといったこともありませんでした。

7 教育制度

パキスタンの場合、富裕層と貧困層との差が大きく、富裕層は初等教育から私立学校に通わせ、高等教育は海外へ留学、といったコースをたどることが多いようです。一方、貧困層は、学校へ行くことさえもできずに、家の生計を支えるために働いたり、手伝いをする人が多いのです。

パキスタンの就学率は、小学校が 66 %、中学校が 29.5 % というデータがありますが、実際のところは、途中、ドロップアウトをしたりして、学校へ行けない子どもたちはさらに大勢いるようです。

年齢	学年	学校種別
22	18	医
21	17	
20	16	文理法 <大学院>
19	15	
18	14	理系 文系 <総合大学>
17	13	
16	12	理系 文系 <大学>
15	11	
14	10	<高校>
13	9	ハイスクール
12	8	公立 <中学校>
11	7	ミドルスクール
10	6	
9	5	
8	4	公立
7	3	<小学校>
6	2	プライマリー スクール
5	1	



時間割例

	月	火	水	木	金	土
8:10	朝礼	朝礼	朝礼	朝礼	朝礼	朝礼
1) 8:20	ウルドゥー	ウルドゥー	ウルドゥー	ウルドゥー	ウルドゥー	ウルドゥー
2) 9:10	英語	英語	英語	英語	英語	英語
3) 10:00	算数	算数	算数	算数	算数	算数
4) 10:50	イスラム	イスラム	イスラム	イスラム	イスラム	イスラム
11:30	中休み	中休み	中休み	中休み		中休み
5) 12:00	理科	社会	理科	社会		理科
6) 12:50	(芸術)	(芸術)	(芸術)	(芸術)		(芸術)
7) 1:40-2:30	(体育)	(体育)	(体育)	(体育)		(体育)

初等教育における学科

学年	イスラーム	ウルドゥー語	英語	算数	理科	社会	一般知識
1	○	○	○	○	○	○	○
2	○	○	○	○	○	○	○
3	○	○	○	○	○	○	
4	○	○	○	○	○	○	
5	○	○	○	○	○	○	

※ 上記資料提供～ JICA 専門家 小出拓己氏

III イスラマバード日本人学校の概要

1 名称

- ・和文名 在パキスタン 日本国大使館附属 イスラマバード日本人学校
- ・英文名 Islamabad Japanese School attached to The Embassy of Japan
- *略称 I.J.S. (アイ・ジェイ・エス)



2 沿革

- ・1975年4月(昭和50年) 補習授業校開始。
- ・1987年4月(昭和62年) イスラマバード日本人学校設立。
- ・1996年1月(平成8年) 新校舎完成, 移転。

3 児童生徒数

- ・ここ数年, 小学部・中学部合わせて20~30名くらいで推移している。

4 派遣教員数

- ・2002年度~8名 2003年度~8名 2004年度~7名 2005年度~6名
- ・その他に, 現地採用教員(常勤講師・非常勤講師)若干名, 現地スタッフ数名。

5 学校教育目標

『共に生きる心を持ち、主体的に取り組む児童・生徒の育成』

日本国の教育基本法及び学校教育法等に準拠し、基礎・基本の確かな定着を図りながら、遠く日本を離れてパキスタンという外国で生活をしていることの特徴を生かし、豊かな心と自ら学ぶ意欲、思考力、判断力を養い、社会の変化に主体的に対応できる児童・生徒を育成する。

6 教育課程

(1) 学期制

- ・1学期(4月1日~8月31日)
- ・2学期(9月1日~12月31日)
- ・3学期(1月1日~3月31日)

(2) 祝祭日

- | | | | |
|-------------|-------------|------------|------------|
| ・5月1日 | レイバーデー(メデー) | ・12月25日 | ジンナー誕生日 |
| ・5月3日 | ムハンマド誕生日 | ・1月22日~24日 | 犠牲祭(第2イード) |
| ・8月14日 | 独立記念日 | ・2月5日 | カシミールデー |
| ・11月9日 | イクバルの日 | ・2月17日・18日 | ムハンラムの日 |
| ・11月14日~16日 | 犠牲祭(第1イード) | ・3月23日 | パキスタンデー |

(3) 長期休業

- | | | | |
|-------|-------------|--------|-------------|
| ・春季休業 | 4月1日~4月9日 | ・冬季休業 | 12月23日~1月7日 |
| ・夏季休業 | 7月22日~8月31日 | ・年度末休業 | 3月17日~3月31日 |

7 学校行事

【1学期】

- ・4月 着任式, 始業式, 入学式, 授業参観, 身体測定, 新体力テスト
- ・5月 家庭訪問, プール開き, 全校合宿, パキスタン体験(フィールドワーク①)
- ・6月 中間考査(中学部), 講話①
- ・7月 期末考査(中学部), 保護者面談, 終業式

【2学期】

- ・8月 夏季休業
- ・9月 始業式, 水泳大会, 工場見学(フィールドワーク②)
- ・10月 IJSデー, 中間考査(中学部), 講話②
- ・11月 運動会, 写生大会, 修学旅行(5年生以上)
- ・12月 期末考査(中学部), 授業参観, 終業式

【3学期】

- ・1月 始業式, 書き初め大会, オレンジ狩り他(フィールドワーク③)
- ・2月 マラソン大会, 年度末考査(中学部), マルガラ登山(フィールドワーク④)
- ・3月 保護者面談, 卒業式, 修了式, 離任式

8 入学金・授業料(2004年度)

- ・入学金 US \$ 250
- ・月授業料 US \$ 250

9 教育の特色

(1) 「学ぼうとする子ども」を育てる

- ・基礎的・基本的内容の確実な定着と学力の向上
- ・問題解決的学習や体験的学習の積極的な導入
- ・個に応じた指導の工夫や少人数指導を生かしたわかりやすい授業の実践
- ・生徒の発表力の育成や考えさせる授業の推進
- ・一人一人の良さや可能性を伸ばす学習評価の工夫・改善

具体的な活動

トライタイムの設定
学習課題の提示（目標の設定）、まとめの工夫（確認）
学習活動の工夫（話し合い学習、発表の機会の設定）
日常的な評価活動の充実（評価表、通信票）
インターネットの活用（パソコン室 会議室の整備）
職員研修（教科研修、現地研修）

※「トライタイム」～「読書・漢字・計算」の基礎・基本を行う

- ・15分×3つの基礎・基本の学習＝1単位時間（「モジュール」での運用）
- ・1単位時間の学習の流れ・・・読書タイム⇒漢字タイム⇒計算タイム
- ・毎週火、水、木曜日の1校時目に全校児童・生徒で実施

(2) 「自他を認める子ども」を育てる

- ・友達への思いやりの心の育成
- ・共感的・多面的生徒理解と教育相談の充実（教師と子どもの心のふれあいの場の設定）
- ・パキスタンの人々（サーバント）への思いやりと生活習慣の理解
- ・総合的な学習の時間の推進
- ・読書の奨励
- ・道徳教育の充実

具体的な活動

異年齢での助け合い学習の場の設定（クラブ活動、部活動、委員会活動）
現地校との交流学习の実施と日本文化の紹介
パキスタン学の工夫とパキスタン文化の理解の推進（総合的な学習）
英会話の充実（総合的な学習）
読書の時間の設定

※総合的な学習の時間の工夫～現地理解教育

- ・「パキスタン学」（週1時間）、「フィールドワーク」（年4～5回）の実施
- ・ネイティブスピーカーによる英会話（少人数習熟度別編成、週2時間）の実施

(3) 「しなやかな子ども」を育てる

- ・元気と活力のある学校
- ・体育指導の充実と全校体育の実施
- ・安全指導と危機管理の徹底
- ・生徒自身が自らの在り方や生き方を考える進路指導の充実

具体的な活動

あいさつの奨励
運動能力の、体育測定の実施とその分析
全校体育の工夫と水泳指導
体育的行事の工夫（運動会、水泳大会、マラソン大会、登山）
避難訓練の実施（バスによる登下校、火災と地震、暴徒乱入等）
外部講師の話聞く会（講話）の実施

※特色ある行事

- ・「I. J. S. DAY」～他校との文化交流を通じ、異文化の理解と日本文化を発信するI. J. S. 最大の学校行事
- ・「全校合宿」～密度の濃い人間関係を築く1泊2日の学校での合宿
- ・「講話」（年2～3回）～パキスタンで活躍する日本人の話聞く（各組織・関係機関、個人）

IV パキスタンでの生活雑感

～ パキスタンの衣食住、そして宗教 ～

1 「衣」

パキスタンの民族服「シャルワール・カミーズ（シャルカミ）」は、特に義務でもないのだが、子どもから大人まで、ほとんどの国民が普段着として、あるいは正装着として愛用している。イスラマバードの都市部では、洋服（若者はカジュアルに、ビジネスマンは背広で）を着ている姿をかなり見かけることが多くなったが、現地女性の洋服は見かけることはなかった。

都市で生活している上では、洋服で街を歩いていてもあまり気にすることはなかったのだが、少し周辺部へ行くと珍しそうに見られてしまう。特に、西方のペシャワール（北西辺境州の大都市）に行ったときはシャルカミを身につけた。ペシャワールでは、女性はブルカをかぶり、黒っぽい地味なシャルカミ姿で、顔を見せている姿はほとんど見られることはなかった。

2 「食」

この地方の文化は「スパイスの文化」ではないかと思ってしまう。いろんな辛さがここにはある。マーケットには香辛料専門の店が必ずあり、様々な香辛料が山盛りになって売られている。

「マサラ」という、香辛料をふんだんに使い、トマトやにんにく、生姜を混ぜて作るさらさらぎとぎとしたカレーのような料理が毎食の基本メニューである。チキンマサラにしたり、ベジタブルマサラにしたり、ビーフマサラやダル（豆）マサラにしたりしてバラエティなものに工夫している。

そして、それに「チャパティ」という発酵させていない薄いナンのようなもの（円い形が多く、「アタ」という小麦粉と水、塩で作る）をセットで食べることになる。だが、わたしは毎食、いや毎日でもきついので、1か月に数度、現地の人に作ってもらっては食べていた。たまにはよい。

また、日本のお茶のような感覚で出てくるのは「チャイ」といわれるミルクティーである。でも、現地の人ほとんどもなく多量の砂糖を入れる。わたしには甘過ぎ。ここの人達の味覚はダイナミックである。マサラの油といい、チャイの砂糖といい、貧しい人達が多いせいなのか、カロリー摂取の仕方が極端で、何となく不健康そうである。日本の味覚の繊細さを再認識した。

それでも、みんなが口をそろえて美味しいというのがチキンである。基本的に鶏は店でつぶして売ることになるのでとても新鮮。チキンティカ（鳥の串焼き、ごろっと大きい）というのが旨かった。ここでは、ラムやマトンも人気だが、チキンにおいては最大美味のタンパク源である。

宗教上禁止されている物に、よく知られている「アルコール」があげられるが、実はパキスタン国内でも製造している。イスラマバード近郊にあるマリーというところで「マリービル」が作られている。イスラム教徒以外の人達に許可証を発行して購入できる仕組みになっている。味は賛否両論であるが、慣れると旨い、といったところか。ただし、酒好きのパキスタン人は多いように思う。

3 「住」

わたしが借りた家は、イスラマバード都市部の一般的な家で、二階建ての一軒家である。レンガ造りで、床はすべて大理石である。日本のイメージから見ると、一個の部屋がとても大きく、さらにそれが1・2階に3～4部屋ずつ普通にあるので、家そのものがとても大きく大きい。家探しをしていたときは、極力小さい家を選ぼうと思ったほどだ。それでも、使わない部屋がいくつかあった。各部屋には、シャワーやトイレがついていることが多い。また、クーラーがないと過ごせない時期が長く続くのだが、部屋の天井には大きなファン（扇風機）が必ずついている。最初の頃は、回っているのが落ちてきたらひとたまりもないなあ、と思いながら不安でしようがなかった。また、夏場は、階段を一段一段上るたびに温度が高くなっていくような感覚が、嫌な気分させた。

普通のパキスタンの家庭は、親戚も同居しながら大家族を形成していることが多い。また、低階層の生活者たちや難民は集団でコロニーを形成し、土壁や雑品を利用した簡素な家を造って住んでいる。華やかな高級マーケット街の向いにそんなコロニーが存在するという、愕然とする光景が見られるのである。時代の変化と国の現状、昔からのカースト制が渾然一体となっているようだ。

4 「宗教」

イスラム教は非常に戒律を重んじる。国民の生活とは切っても切り離せない。イスラム教の上に生活が成り立っている。ムスリム（イスラム教徒）ではないわたしから見てイスラム教を身近に感じたのは、まずは1日5回のお祈り。敬虔なムスリムほど信仰に厚くお祈りをかかさない。

モスク（イスラム寺院）から流れるアザーン（お経のようなものといえばよいか）が、まず日の出前に聞こえてきて起こされる。モスクは、イスラマバード市内だけでも200～300はあるといわれており、当然のように、わが借家のそばにもあった。ただ、人間慣れると適応するようで、そのうち目覚ましがわりに、あと2時間寝られるな、などと妙な心地よさを感じたのものである。大方は、モスク以外のいたるところでお祈りをするところが多いのだが、金曜日の午後の礼拝は最も重要で、モスクへ行ってお祈りをするため、2～3時間は現地スタッフに仕事は頼めなくなる。

次に印象深いのは、「ラマダン」といわれる1か月におよぶ断食。とはいっても、日の出から日の入りまでの間。かえってこの期間の食物消費量の方が多いというデータもある。なぜ、現代においてこのような非効率的な行いをするのかという非ムスリムの声もあるようだが、ムスリムにとっては精神を高め、感謝の気持ちや連帯意識を高める効果があるという。われわれにとって一番気をつけたのが、日没前の交通事故。イフタール（一日の断食明けの食事）に急ぐ人達の家路に帰る、あるいは食事場所に向かう車の運転の荒々しさ。もちろん、下校時刻はこの時間帯を避ける、ドライバーには仕事をさせない。誰にも残業なる言葉は見あたらない。イフタールは至福の時間である。

1か月のラマダンが終わるとラマダン明けのお祭（第1イード～日本のお正月のよう）があり、親族が集まって過ごしたりする。借家のオーナーも、この時ばかりは甘いケーキを持って挨拶に来る。娘にはお年玉をくれた。この3日間、ほとんどマーケットのお店は休むことが多い。

イードは、第1イード（ラマダン明け）と第2イード（犠牲祭～メッカへの巡礼明け）があり、第2イードでは山羊や牛を一軒で、あるいは数件の家庭が共同で購入し犠牲にする。3分の1は神へ、3分の1は自分の家へ、3分の1は貧しい人達へ贈るといった慣習がある。一度、招待を受けたが、7人の男性が牛を縛りながら押さえ付け、1人の男性が大きなナイフでのどを一気に切る。1時間ほどで皮をはぎ内蔵を取り出していった。その後は肉を分けることになる。牛の体温や声・表情・変化も生々しく心に焼きついている。生き物が食べ物にかわる瞬間を目の当たりにし、命を食らうことの重みを背負ってしまった感をもった。生活と生死が当然のように結びついている。

イードのように、現地に生活すると、宗教行事における祝祭日はイスラム暦で行っていることが多い。イスラム暦は太陰暦であるから、1か月が29～30日となり、1年が354日、年間にすると11日ほど短くなる。従って、祝祭日とその年ごとにずれて、学校の年間行事の予定を組むのに一苦勞する。計画や予定を立てづらいのはやっかいであるが、現地の人にとっては当たり前のことであり、普段よくある、約束した時間に来ない、約束事が果たせなかった、などというトラブルは、まさに「インシャッラー（神の御心のままに）」の世界なのだと、つくづく思う。

5 「日本とパキスタンとのかかわり」

パキスタンの中の日本、という観点から見れば、一番に挙げられるのは「自動車」であろう。特にカローラは最高級車である。わたしは、購入・納車まで3か月はかかるといわれ、韓国車に乗っていた。「TOYOTA」を筆頭に、日本車への信頼度は厚い。中古でも、日本で考えられないような値段で売れるから日本でのパキスタン人の中古車業者が多いのにも頷ける。また、「SUZUKI」といえば、軽トラックの代名詞にもなっており、引越の時には大活躍。「HONDA」などのバイクも人気。ちなみに消防署見学に行ったときの消防車は全て「MITSUBISHI」のロゴが入っていた。

もちろん、電化製品も「MADE IN JAPAN」は特に人気が高い。高品質高性能だからか。わが家のオーナーは、インターネットで「SONY」のデジカメを買っていた。ワールドワイドになったようだ。中古業者が多く、物を大事にするという精神がこの国にはある。ゴミも宝である。

日本とは古くからのつきあいで親日家が多いようだが、敗戦から努力して経済大国に発展させたことへの敬意という見方、一方でアメリカと戦争した国としての評価もあるようだ。最近では、アメリカに追随しているという批判もある。現地のいろんな世代の人からそんな話を聞くと、日本人という意識を否応なく意識させられ、その国に生活するということの重みを味わった。

V おわりに ～パキスタンでの三年間～

「かわいい子には旅をさせろ」という言葉をよく耳にしますが、この言葉のありがたみを知ったのは、小学3年生か4年生の時になります。友だち3人で冬休みに、帯広市（私の生まれた土地）から釧路市まで片道約120kmの鉄道旅行を計画した時のことです。子ども達だけの1泊2日の旅でしたから、親は当然反対したのですが、祖父が、冒頭の言葉を使って両親を説得してくれたことを今でも覚えています。まあ、「かわいい」というのは当てはまりませんが、今は亡き祖父にはとても感謝しています。ただ、それ以上に、その冒険ともいえる旅での体験が今でも強く心に残っています。わたしの原体験といえるでしょう。列車から見たキタキツネ、湖で見たハクチョウの群れ、雪原で見たタンチョウヅル、どれも実際に見たのは初めてでした。「初めて見るものは、胸がわくわくするなあ。世の中には、ぼくの知らないことがいっぱいあるんだな。」そんな思いをもった旅でした。このことがきっかけで好奇心が一層旺盛になったように思います。なにせテレビで見ていたフランク永井の「有楽町であいましょう」という歌を聴き、近くのジンギスカン屋の名前だったのでそのことかと思っていたり、「銀座の恋の物語」の歌は、中心街にある銀座商店街の歌だと思っていたぐらいでしたから、当時のわたしの一般常識がどの程度か想像がつくことでしょう。

新鮮な感動を覚えたこの旅、「好奇心」「チャレンジ精神」という点では、パキスタンにおける生活もその延長線上にあったといえます。ここでの生活で、世界がぐっと身近に感じるようになってきましたし、新鮮な感覚は自分に大きな影響を与えてくれました。パキスタンで強く抱いた感覚、例えば、赴任当初に感じた、歴史の流れの中に放り込まれたような違和感、カラコルムハイウェイを北上したときに感動した人間の飽くなき挑戦と不屈の努力、そしてわずかの土地にも根を張って生きている人間の営みのたくましさとしたかさ、断崖絶壁に延々と続くシルクロードを見た時の気の遠くなるような感覚、犠牲祭で体感した生や死と向き合う厳しさ、命の重み等々。そして、それらによって、それぞれの土地の歴史と伝統の重みを感じつつも、それを消化しきれない自分自身がまたそこにいることを併せて認識させられる。文明や文化の発達や違いについて机上ではある程度理解しつつも、やはりそれだけでは想像力に限界があり、その場に立ち会ってその空気に触れ、五感を働かせることにより切実な体験となり、また、それが思考の広がりや深まりを生み、豊かな想像力と創造性へとつながっていく。まさにこれらの生々しい感覚は、そんなことを実感できた瞬間なのだと思います。

教育に携わっていて思うのは、思考・判断力や表現力を育成することが声高に叫ばれている現在、わたし自身はそのベースとなる感性を磨き豊かにすることこそ今日的な課題と思えてなりません。技術的なことは計画的に身につけさせることは可能ですが、感性的な面はなかなかそうはいきません。親子の対話が重要だったり、周囲の大人が関わったりしながら育まれていく部分と併せ、何よりも体験、経験が大きいような気がします。自分の心を揺さぶるもの、情動を高めるもの、自分らしさを生み出すもの、それこそが体験を通じた感性にかかっていると思われまます。

自分にとって価値あると思う体験をすることは、感性を育み、想像力を広げ、創造性につながると思っています。五感とは脳の出先機関（器官）であります。パキスタンで生活した中で、五感を通して学んだことは本当に数多くありました。それを経験させていただいたことに感謝します。

パキスタンでの3年間は、日本ではきっとできないであろう、スケールの大きな体験をしました。その最たるものは、今まで頭で考えたことはあっても体で覚えたことのない、歴史の中の自分を意識し、生命の連続線上での自分の存在を実感する、そんな希有な感覚です。その感覚を享受し、自分をさらに深く見つめるきっかけができたのは、まさにパキスタンでの生活があったからだと思います。

そして同時に、やっぱり「かわいい子には旅をさせろ」と思うのです。